

自らの思いや意図をもち、創造的に表現しようとする生徒を育む授業の工夫 ～自ら学ぶ力を育てる音楽の授業～

岩間 綾

1. 主題設定の理由

現在の学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現が重視されている。音楽科においても、「思いや意図をもって、創造的に表現する活動」を通じて、生徒が音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で音や音楽を捉えることが求められている。

一方で、日常の授業においては、教師の指示に従って音を並べるだけの活動にとどまり、生徒が自らの思いや意図、工夫をもって表現する姿が十分に見られない場面もある。そのような学びは、「単なる知識・技能の習得にとどまる学習では資質・能力の十分な育成につながらない」とする指摘(国立教育政策研究所, 2021)に照らすと、課題であるといえる。

そこで本研究では、「自らの思いや意図をもち、創造的に表現しようとする生徒を育む」ことを研究主題とする。ここでいう「創造的に」とは、学習指導要領に示されている表現であり、生徒が自らの思いや意図を出発点に、強弱やリズム、旋律など音楽を形づくっている要素を手がかりとして試行し、表現の方法を工夫しながら意味のある音楽表現を見いだす営みを指す。

また、表現活動においては、「完成度の追求以上に、思いや意図をもって表現すること」が重視されている。多様な感じ方や考え方を尊重する学びは、生涯にわたり音楽を味わい・創造し・表現する資質・能力を育成するためにも重要である(国立教育政策研究所, 2023)。したがって本研究では、思いや意図の言語化、相互評価、振り返りの工夫を通して、生徒が自ら学びを深める力を育てる授業づくりを進めていく。

2. これまでの研究のあゆみ

本校音楽科では、令和4年度より「聴取活動による音楽的な感受を基にした、思考力・判断力・表現力等を育む授業づくり～生徒の創造性・主体性を育む音楽の学習活動について～」を研究主題に掲げ、音楽を「感じる」「考える」「表す」ことをつなげながら、生徒の創造的・主体的な学びを促す授業改善を進めてきた。

この研究は、令和4～6年度の全体研究主題「新たな価値を創造する生徒の育成」と深くつながっている。音楽科における「創造性」の育成とは、生徒が自ら問いをもち、音楽的な感受や考えを基に新たな意味や表現を生み出していくことと捉えている。表現を試行錯誤する過程こそが、新たな価値を創造する学びである。

令和6年度は、聴取活動を学習の中心に据えた。単に音楽を聴くだけでなく、「どのように感じたか」「なぜそう感じたのか」「どのような音の工夫があったか」といった問いをもつことを大切に、音楽的な感受を深めながら、表現や思考へとつなげていく授業づくりに取り組んだ。

学習指導要領解説では、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」が音楽への見方・考え方とされている。この考えに基づき、授業では楽曲の構成やリズム・旋律などに注目し、「なぜそのように感じたか」を楽譜や演奏と照らし合わせて考える活動を取り入れた。

さらに聴取活動から得た感受を表現へつなげる学習を重視し、「このように感じたからこの音を使ってみよう」「ここを強くするとより伝わるかもしれない」など、自分なりの思いや意図をもって演奏や創作に取り組めるよう題材や発問を工夫した。

他者との学び合いの場も意図的に設けた。友達の演奏や意見を聴き合い、「伝わったこと」「感じたこと」などを言葉で伝える活動を通して、自分の表現を見直したり、新たな視点を得たりすることができた。生徒同士の対話を通じて、「伝える表現」から「伝わる表現」へと意識が深まっていった。

授業の最後にはふり返りの時間を設け、「自分はどう感じたか」「どのように表現したか」「どんなことに気づいたか」などを記録させた。録音や録画を活用して自分の演奏を振り返る場面も取り入れ、「自分の音楽を自分で評価する」視点を育てていった。

こうした学習の流れは、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」(創造性)を育てるものであり、思考力・判断力・表現力の育成と深く関わっている。令和6年度は、音楽を聴いて感じることを起点に、考え、表現し、ふり返るという学びの土台をつくる1年となった。今後はこの土台をもとに、より探究的で創造的な音

樂の学びへとつなげていくことを目指していきたい。

3. 全体研究との関わり

本校の全体研究では、「自ら学びを深める生徒の育成～自立した学習者を育むための授業の創造～」を研究主題に掲げており、すべての教科において、生徒が自分の考えをもち、問いをもって学びに向かう授業づくりが求められている。

この主題に基づき、研究の趣旨では「生徒が自ら問いをもち、自分なりの見方や考え方で深め、他者と対話しながら学びを再構成していくこと」が、これからの学びにおいて大切な姿勢であると示されている。また、本校の全体研究においては、「自立した学習者」とは、「学びの場面において、自己選択・自己決定を繰り返し、課題の解決に自ら進んで向かう者」と定義されている（全体研究総論より）。この定義は、すべての教科において、生徒自身が考えをもち、主体的に学習に向かう姿を目指すものである。

この考えを踏まえ、音楽科では「自らの思いや意図をもち、表現の方法を主体的に選び、対話や振り返りを通して表現を深めていく生徒」の姿を、「自立した学習者」に重なるものとして捉えている。音楽科においても、単に知識や技能を身につけるだけでなく、表現や鑑賞を通して生徒自身が「どのように音を表したいか」「なぜそのように感じたのか」といった問いをもち、自分の思いを他者と共有し、対話を重ねながら深めていくような学びを大切にしたいと考える。

また、音楽科に特有の学びとして「言葉だけでは伝えきれない感情や思いを音に託す営み」がある。自らの思いや意図を言語化し、音で表現し、他者との対話を通じて再構成する過程は、多様な見方や考え方に触れながら自己理解と他者理解を深める営みである。このような学びは「主体的・対話的で深い学び」の実現に直結する（学習指導要領より）。さらに、他者の表現を聴き、対話を通して自分の感じ方や考え方を見直していくことは、多様な価値観に触れながら、自己理解と他者理解を深めていく営みである。その中で生徒は、感じたことをもとに考え、考えたことを音に表して試しながら学びを深めていく。こうした姿は、自立した学習者の在り方と重なるものといえる。

このような学びを実現するために、本研究では「自ら学ぶ力を育てる音楽の授業」を副主題に掲げ、次の3つの視点から授業づくりを進めていく。

(i) 思いや意図を言葉にし、表現の見通しをもつこと

生徒が「どう表現したいか」「何を伝えたいか」と考え、言葉にすることで、目的をもって表現に取り組む力を育てる。この思いや意図の言語化が、表現の方向性を明確にし、集中力や思考力の向上にもつながる。

(ii) 音や音楽の知覚と感受を、音楽を形づくっている要素の理解につなげ、自ら問いをもって学ぶこと

音や音楽を聴いて「どのように感じたか」「なぜそう感じたのか」といった感受や知覚を出発点にして考え、それを音として表して確かめることで学びを深めていく。音楽を形づくっている要素を手がかりに、自分の表現を見直し、説得力と創造性のある音の使い方を探究する力を育てる。

(iii) 他者との対話を通して表現を見直し、深めること

互いの作品を聴き合い、感想や気づきを伝え合うことで、自分の表現を再考・再構成する姿勢が育つ。対話を通じて「よりよい表現とは何か」を多面的に考え、自己調整しながら学びを深める力を養う。

これらの実践を通して、生徒が音楽を通じて自ら考え、他者と学び合い、表現を深めていく姿を目指している。これは全体研究で目指す「自立した学習者」の育成と深く結びついている。

4. 今年度の研究について

(1) 研究の目的

1年次では、生徒が「どう表現したいか」「何を伝えたいか」といった自分の思いや意図をもって表現に向かう姿勢を育てることを目的とする。これは、表現をただこなすのではなく、自ら考え、選び、試す学びの出発点をつくるための大切なステップである。

そのために、思いや意図を言葉にしてみる活動や、他者の表現を聴いて話し合う場を取り入れ、「表現に目的をもつこと」「他者と学び合うこと」を経験させる。さらに、「なぜこの音がいいと思ったのか」と問いをもつ学びへつな

げることが重視する。

こうした取り組みを通して、生徒が自分の表現に責任をもち、音楽を通して学びを深めていく姿の土台を築いていく。

(2) 研究の計画

1 年次	◎思いや意図をもって、表現に向かう力を育てる ・生徒が「どう表現したいか」「何を伝えたいか」を考え、意図を言葉にする場を設定する ・聴き合いや話し合いなど、他者と音楽を通じて関わる経験を重ねる ・音や作品への感受をもとに、問いをもてるような題材や導入を工夫する ・自分の感じ方や考えを整理しながら、学びに向かう姿勢を育む
2 年次	◎表現を探究し、他者と学び合いながら考えを深める力を育てる ・表現→対話→振り返り→再構成という学びの流れを明確に授業に位置づける ・他者からのフィードバックをもとに、自分の表現を再構築する体験を重ねる ・音楽の仕組みや背景（形式・旋律・時代性など）に基づいて表現を考える力を育てる ・多様な音楽に触れながら、自分の感じ方や価値観を広げていくことを促す
3 年次	◎学びをふり返り、自ら課題を見出し学びを広げる力を育てる ・表現の過程や振り返りを記録・共有し、学びの変容を可視化する ・自分の成長や課題に気づき、それをもとに学びの方向を考える力を育てる ・授業モデルや評価の視点を整理し、音楽を通じて育まれる資質・能力を明確にする

(3) 内容

① 思いや意図を言葉にする活動の導入 ・「どのような気持ちを伝えたいか」「どんな音をつくりたいか」などを演奏・創作の前に考える時間を設定 ・ワークシートやふり返りなどで、思いや意図を簡単な言葉で書いたり話したりできる場を用意する ・思いや意図を言語化することで、表現に対する目的意識と見通しをもたせる
② 聴き合いや対話による表現の見直し ・同じ題材で表現した他の生徒の演奏や作品を聴き、「伝わったこと」「よいと思った点」などを伝え合う活動を行う ・話し合いのルールや書き込みの工夫を通して、安心して対話に参加できる雰囲気をつくる ・他者の考えや表現に触れることで、自分の表現を見直す視点が芽生える
③ 問いを引き出す題材の工夫 ・生徒が「なぜこの音がよいのか」「どんな表現が合うのか」と問いをもてるような題材を工夫する ・生活や感情と結びついたテーマ（例：季節・風景・感情など）をもとに、表現のイメージを膨らませる導入を考える ・初発の感受を大切にしながら、探究への入り口をつくる
④ 感じたことを整理し学びに向かう姿勢を育てる。 ・感じたことや考えたことをふり返る活動を通じて、自分の学びを客観視する経験を積む ・小さな気づきや変化に注目し、「できたこと」や「次にやってみたいこと」に気づかせる ・表現することが自分の思いとつながっているという実感をもたせ、学びに向かう力を育む

これらの取り組みを積み重ねることで、生徒が音楽を通して主体的に考え、学び続けていく力の育成につなげていきたい。

〈引用・参考文献 等〉

- ・文部科学省(2020)『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』
- ・文部科学省(2020)『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のための参考資料』
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2021)『「資質・能力」の育成に係る評価の充実に向けて（中学校）』
- ・国立教育政策研究所(2023)『「令和の日本型学校教育」を担う教員の養成・研修の在り方について』
- ・山梨大学教育学部附属中学校（令和7年度）『全体総論』
- ・山梨大学教育学部附属中学校 音楽科（令和4～6年度）『音楽科教科総論』
- ・山梨大学教育学部附属中学校 音楽科（令和4～6年度）『音楽科研究紀要』